

## ヨハネの福音書 8:12 光は大事です。(26. 3. 8)

今日の本文では、イエス様はご自分のことを次のように紹介されています。12節を一緒に読んでみましょう。イエスはまた彼らに語って言われた。「わたしは、世の光です。」

ヨハネの福音書の中で、イエス様はご自分が誰であるかを何度も語っておられます。

6章では「わたしは命のパンです」と語っているし、10章では「わたしは良い牧者です」、15章では「わたしはぶどうの木です」というように、全部で7回もご自分について語られました。その中で本文には「わたしは世の光です」と言われたのです。

まず、イエス様がどのような状況でこの言葉を語られたのかを考えてみる必要があります。

今日私たちが読んだ箇所のおすぐ前には、仮庵の祭りの最後の日、8日目の出来事が記されています。パリサイ人と律法学者たちが、姦淫の現場で捕まえられた女性を連れてきて、イエス様にこう質問しました。「モーセの律法では、このような女性を石打ちにせよと命じていますが、あなたはどうかしますか。」

このやり取りが行われた場所が、神殿にある「夫人の庭」と呼ばれる所でした。この「夫人の庭」は、ユダヤ人の男性と女性は共に入って礼拝できる場所でしたが、異邦人は入ることができない場所でした。

ヨハネの福音書8章20節を見ると、イエス様がこの「夫人の庭」にある「献金箱の前」で教えておられたことが分かります。ヨハネの8章20節も一度読んでみましょう。「20 イエスは宮で教えられたとき、献金箱のある所でこのことを話された。しかし、だれもイエスを捕らえなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである」

ですから、イエス様がこの場所で、あの女性に向かって「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい」と言われたのもここですし、今日の本文にある「わたしは世の光です」と宣言されたのも、まさにこの場所なのです。

ところで、この「夫人の庭」という場所では、仮庵の祭りの期間中、4つの大きな燭台に火が灯（とも）されていました。一つの燭台の高さが約23メートルもあり、夜になると、その4つの明かりで神殿のどこにいても明るかったそうです。

しかし、祭りの最後の日、8日目の朝にはその燭台の火は消えていました。ちょうど朝日が昇り始めているその時、イエス様は「わたしは世の光です」と宣言されたのです。

一晩中明るかった 燭台 が消え、今まさに本物の太陽が昇ってくる。その光景の中で語られたこの言葉が、**どれほど鮮（あざ）やかに、人々の心に焼き付いたこと**でしょう。

一般的にこの世で、光がどのような役割をしているか、私たちはよく知っています。大きく二つのことを考えてみると第一に、光は命の根源ですね。すべての植物は、太陽の光を受けて自分自身でエネルギーを作ります。実を結んだり、草食動物が食べられる植物として成長したりします。食物連鎖の中に「1次生産者」である植物があるからこそ、草食動物が植物を食べ、肉食動物がその草食動物を食べ、そして人間がそれを食べることができるのです。

時々、羊や牛を見て「草だけ食べているのに、どうしてあんなに大きく育つのだろう？」と不思議に思うことはありませんか？ 牛を見れば分かりますが、草を食べるだけであんなに大きく育つのです。そのおかげで、私たちは美味しい和牛を食べることもできますし、牛乳やチーズを味わうこともできるのです。

ですから、もし1次生産者である植物がなければ、草食動物は食べるものがなくなり、生き残ることはできないです。

また、植物は光を通して光合成（こうごうせい）をしますね。二酸化炭素を吸収して、酸素を排出します。反対に、動物や人間は息を吸う時に酸素を取り入れ、吐き出す時に二酸化炭素を出します。つまり、植物は光によって酸素をたくさん作ってくれる「酸素工場」なのです。

私が札幌に来て感じたのは、「空が本当に綺麗だな」ということです。空気もとても新鮮です。ソウルは春になると黄砂（こうさ）の影響で空がぼんやりしています、ひどい日は外に出ることさえできないです。春のある日は、ニュースで「外出はできるだけ控えてください」と呼びかけられます。その時、澄んだ空気がどれほど大切なものを身に染みて感じました。そういう意味で、札幌は空気がよくて本当に良かったなと思っています。

このように、光はこの世の「命の根源」だと言っても過言ではないです。

もう一つ、光は暗闇の中で進むべき道を教えてくれます。本当に暗い場所では、私たちはまともに歩くこともできません。

今、私が住んでいる家でも、電気を消すと本当に真っ暗です。ですから、スイッチを探すために手探りで歩かなければなりません。「何かにぶつかるんじゃないか」と不安になりながら、その短い距離なのにどこへ行けばいいか分からず、おそるおそる歩きます。でも、その瞬間にパッと光が入ると、どれほど安心し、どこへ行くべきかがはっきりと分かることでしょうか。

このように、光は私たちの日常生活において、なくてはならない大切なものです。すべての生命体の「命の源」であり、暗闇の中で「進むべき方向」を教えてくれるガイドでもありま

す。もちろん、これ以外にも光の恩恵はたくさんありますが、この二つを考えただけでも、その大切さはすぐに分かりますよね。

**ところが今、イエス様が「わたしは世の光です」と宣言されているのです。**

光はすべての命の源（みなもと）だと言いました。光があつてこそ、すべての生命体が生きていけるように、イエス様もまた、私たち人間の命の源なのです。

何の意味かという。本文の前に出てきた「姦淫の現場で捕らえられた女性」は、本来、罪と裁きによって死ぬしかなかったです。もしイエス様がいなかったならば、彼女は周りの人々に石で打たれ、怒りと裁きの中で命を落としたか、あるいは、深い傷を負って生きていくしかなかったでしょう。

しかし、イエス様の光がこの女性を照らした時、彼女は罪と死の中から命を得て、新しい人生を歩み始めることができました。

光であるイエス様は、罪と死に閉じ込められた私たちを罪から自由にさせ、死から救いを与えてくださる方です。実は、イエス様の光が照らされるまでは、私たちは、何が罪なのか、なぜ自分に救いが必要なのかさえ、分からないものなのです。

私自身も、「自分は本当に罪人であり、救いが必要だ」と悟った時がありました。

ある日、一人で、家で聖書を読んでいました。神様がエゼキエルに「これらの骨は生き返ることができるか」と問いかけられた箇所だったのですが、まるで神様が私に直接質問されているように感じました。それで読みながら、「神さま、それは不可能でしょう」と心の中で答えました。

するとその時、神様は私の中に隠されていた醜（みにく）い姿を見せてくださいました。実は、私、家族の中で、10歳上の姉を本当に憎んでいました。なぜかという、私が子供のころ、一人でラーメンを食べていると、姉がきて私のラーメンを奪って食べたです。実はそれが本当に嫌だったのです。それが一回だけではなく、何回も繰り返されて姉のことを心から憎んでいました。ある日、姉が寝ている時に、ちゃぶ台と言うのでしょうか。小さなテーブルをたたんで、壁に斜めに立てかけてありました。それを私の足で下を押して、寝ている姉の頭に落ちるようにしたのです。それで姉の上にそのまま落ちました。どうなったのかは、皆さんの想像に任せます。その時、わたしは何も知らない顔をしていました。そのくらい、私は姉のことを憎んでいました。その醜い姿、家族さえ愛することができない自分の姿と、その瞬間、向き合わされたのです。ああ、私はこんなにも罪深い者なのだ。何もないことで、姉が痛い目に遭うことを願ってしまうほど、私は罪人なのだ。この罪のゆえに、私は永遠の死に向かうしかない存在なのだ。だからこそ、私には救いが必要なのだ、その時しみじみと感じました。自分の力では決して解決することができない。だからこそ、イエス様が十字架の上で私の身代わりとなって死んでくださったことを受け取り、心から感謝でいっぱ

いになりました。死ぬしかなかった私が、イエス様によって生かされたのだ……。そのことを、その時初めて心から悟ったのです。イエス様は、私たちにとってまさに「いのち」そのものなのです。

イエス様も、ヨハネの福音書14章6節でこのように言われました。

**「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」**

姦淫の現場にいたあの女性の状況を、もう一度考えてみると、その場所には、女性の罪、指導者たちの私欲、定め、怒り、裁き、憎しみ、そして「死」しかありませんでした。そこは、深い闇に包まれた場所でした。

しかし、そこにイエス様の光が差し込んだ瞬間、どうなったのでしょうか。それまでの闇は消え去り、「赦し、愛、回復、救い」という光が溢れるようになったのです。

この世にイエス様の光が照らされると、罪の中にいた人は罪を憎むようになり、罪を遠ざけるようになります。誰かを裁き、憎んでいた心にイエス様の光が差し込むと、その心は「憐れみと赦しの心」へと変えられます。そして、死ぬほど苦しかった人が、イエス様の光に照らされると、その困難の中でも「生きていく力」を得るようになるのです。

これは、決して聖書の中にだけ書かれている話ではありません。今この瞬間も、イエス様の光によって罪を離れ、イエス様の光によって苦しい状況に打ち勝ち、毎日新しい力を得て生きている人々が、私たちの周りにも現実に存在しているのです。

日本に中島哲夫（なかじま てつお）という牧師がいます。以前の職業は、なんと「ヤクザ」でした。現役時代は、手元に現金が30億円もあるほどで、「金があれば何でもできる」と思っていたそうです。

ところが、唯一お金でできなかつたのが、今の奥様でした。韓国人の女性ですが、中島さんがあまりにも彼女を好きでプロポーズしたところ、奥様は二つの条件を出して結婚を許しました。一つ目は「私はクリスチャンだから、結婚したら一緒に教会に行くこと」。二つ目は「私の信仰生活を絶対に邪魔しないこと」でした。

中島さんは「教会？まあ、それくらいなら難しいことじゃない」と思い、教会に通い始めました。行ってみると案外悪くないなと感じ、平日の6日間はヤクザとして、日曜日の1時間だけはクリスチャンとして生活し始めました。もちろん、当時はイエス様を信じてはいませんでした。中島さんは「彼女が好きだから教会に行くだけで、決して信じるつもりはないぞ」と、固く心に決めていたのです。

そうして数年が過ぎたある日のことです。部下と待ち合わせをしたのですが、その下の子が30分も遅刻してきたのです。腹を立てた中島さんはその部下のを殴ったり、蹴ったりしてい

ました。しかし、その時、突然心の中から「暴力は罪だ」という思いが鮮明に湧いてきました。中島さんは驚いて、自分でも何が起きたのかとおかしいと思っていました。また数日後、麻薬をしていた時には、心の中で「いつまでそんな生き方をするのか」という罪悪感が湧き上がってきました。以前はそんなこと、一度も感じたことがなかったです。どう考えても教会を通い始めて、そのような思いが生じているんだと分かりました。

中島さんは悩みました。「わたしはヤクザなのに、暴力が罪だとか、麻薬で罪悪感を感じるとヤクザとしてこれはマイナスだと思いました。そして、どうすれば教会に行かずに済むだろうか」と考えました。

そんな時、通りがかりの一つの教会に入っていました。そして牧師先生を呼び出し、こう尋ねました。「わたしのようなヤクザが教会に来ちゃいけないんですよね？ **迷惑ですよ？**」

「そうですよ、迷惑ですよ」という返事を期待したのです。そう言われれば、それを口実に二度と教会に行かないつもりでした。ところが、その牧師の態度が急に変わり、聖書を持ってきて、マタイの福音書9章13節を読んで聞かせたのです。

**「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためです。」**

牧師はこう言いました。「あなたがヤクザであり、罪人であるなら、イエス様はあなたを招待しておられます。ですから、堂々と教会に通い続けてください」と

その言葉を聞いた中島さんは、「わたしこそが、教会に行く最高の権利がある人なんだ！」と悟り、それからは部下たちに「あなたも罪人だろ？ お前もだろ？」と言って、ヤクザたちを連れて教会に通い始めたそうです。そうして時が流れ、10年以内にヤクザを引退し、神様の呼びによって牧師となられ、今も貴い働きをされています。

イエス様の光が照らされると、これまで断ち切ることができなかった罪から解放され、新しい命を得て生きるようになるのです。

第二に、光は暗闇の中で「進むべき道」を教えてください。暗闇の中では、どちらへ行けばいいのか全く分かりません。しかし、光が差し込めば、行くべき道が見えてきます。ですから、私たちは光によって、暗闇の中でも迷わずに正しい道を歩むことができるのです。

詩篇119篇105節には、このように記されています。

**「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。」**

まさに、神様のみ言葉が、私たちが本当に進むべき道を教えてくださいというのです。

姦淫の現場で捕らえられた女性のことを関連して考えてみると、イエス様は「わたしもあなたを罪に定めない」と言われました。そして続けて、「今からは、もう罪を犯してはなりません」と語りかけられました。

彼女はイエス様によって、もう一度生きるチャンスを得たのです。それだけではありません。イエス様は、許された者としてこれからどう生きていくべきか、彼女が歩むべき「新しい道しるべ」を立ててくださいました。

イエス様の光は、暗闇の中で「今、自分がどのように振る舞うべきか」を教えてくださいな光なのです。なので、私たちを命の道、正しい道、真理の道へ導いてくださいます。イエス様に従う人生は決して悪いことではないです。変なものでもないです。むしろ、正しい道であり、真理の道であり、命の道であります。

三浦綾子さんの話をわたしはよく知っています。彼女は太平洋戦争中、教師として子供たちに「天皇は神様であり、この戦争は正しい戦争だ」と教えていました。しかし、終戦後、彼女は大きな衝撃を受けます。昨日まで「真理」だと言って教えてきた教科書の内容を、自分たちの手で墨（すみ）で塗りつぶさなければならなかったのです。

その罪悪感に苦しんだ彼女は、教職を去りました。その後、13年間に及ぶ肺結核（はいけつかく）との闘病（とうびょう）生活が始まります。その暗闇のような苦しみの中で、彼女は友人である前川正（まえかわ ただし）を通して、イエス様に会ったのです。

本当の光であるイエス様に会った時、彼女は何が正しいのか、何が本当の真理なのかを悟りました。そして、真理を歌う作家となったのです。

さて、再び聖書の本文に戻りましょう。イエス様は「わたしは世の光です」とおっしゃいました。そして、次のように約束してくださいました。12節をもう一度読んでみましょう。

**「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」**

「決してやみの中を歩むことがない」という言葉を、原語で見ると「強い二重否定」で表現されています。つまり、「決して、断じて暗闇を歩むことはない」という意味です。

これは、私たちが一回も闇の中を歩むことがないという意味ではなく、その暗闇が、決してその人を「支配することはできない」ということです。もはや罪に引きずられる「罪の奴隷」ではなく、光であるイエス様が望まれるままに、光を放つ人生を歩むようになるのです。

イエス様に従う者には、それに打ち勝つ力が与えられます。自分自身の力で罪を断ち切ろうとしても、それは不可能です。人を憎んだり裁いたりする心も、私たちの力ではどうにもで

きないです。しかし、イエス様に依り頼み、イエス様に従っていくうちに、私たちの中に光が入り、自然と心の闇が消えていくのです。

以前は罪だと思わなかったことが罪だと分かり、罪を嫌うようになります。人を裁いていた心に、いつの間にか「憐れみの心」が与えられます。諦めたいという思いではなく、光である主を見上げて、信仰によって勝ち進むようになるのです。

そして最後に、12節は何と言っていますか。もう一度読んでみましょう。

**「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」**と書いてあります。

「いのちの光」を持つということは、自分の中にその命の光があるということです。だからこそ、光のような人生を歩めるようになるのです。

世の中の暗闇に染まってしまうのではなく、光の中を歩む者とされるのです。光を放つ人生。多くの人々を生かし、良い影響力を与える人生です。それは、自分の意志や力ではなく、自分の中にある「光」であるイエス様によって、私たちも世の光を照らす人生を歩むようになるのです。

マタイの福音書5章でも、イエス様は「あなたがたは世の光です」とおっしゃいました。世を明るく照らす人生へと、私たちを招いておられるのです。

私たちは、罪と暗闇、絶望と悲しみ、そして虚しさの中で生きる人々に、光のように「希望」となり、「力」となり、生きる「望み」を与え、救いの通路となる人生です。

三浦綾子さんを通して、どれほど多くの人々が力を得て、慰められ、イエス様に出会ったことでしょうか。また、中島哲夫先生も、以前は人々に痛みや傷を与える人生でしたが、今は福音を伝える人生へと変えられました。

そのような意味で、教会の頭（かしら）はイエス様です。イエス様が光であられるからこそ、教会は「世の光」なのです。教会は決して怖い所ではありません。ただ宗教的な儀式だけを行っている場所でもありません。

教会は人を活かす場所であり、生きる力を得る場所です。罪に打ち勝つ力が供給され、暗闇の中をさまよう魂が、進むべき道を見出す場所、それが教会です。

私自身も、教会という場所を通してある意味では、ここに立つことができたのです。生きていく中で疲れ果て、苦しい時、教会に来てどれほど多くの力を得たか分かりません。礼拝の時間を、祈りの時間を、そして御言葉を通してたくさん力をいただきました。そして、さ迷っている時や苦しんでいた中で、進むべき正しい道を悟り、罪を憎むようになり、少しずつ以前とは違う、変えられた人生を歩むようになったのです。

私、一見、優しそうに見えても、私の心の中にはどれほど汚い心があったか分かりません。「いい人」に見える人ほど、実は、内面は恐ろしいものですよ。とにかく、イエス様を知れば知るほど、私の人生にとってどれほど大きな祝福であったかを痛感しています。

教会は人を救う場所であり、傷ついた人を癒やす場所であり、生きる力を注ぎ込む場所です。この貴い教会の働きに、私たちが共に力を合わせて仕えていくのです。その働きに用いられることが、実はどれほど感謝なことでしょうか。

ですから皆さん、来月の総会で各チーム長や役員を選出すると思いますが、もし私が選ばれたら、それは本当に光栄なことだと思ってください。先日の新任牧師研修会で一緒に参加されたある先生に聞いた話ですが、その先生の教会で総会がありました。一年を担う役員の方が選ばれましたが、その選ばれた瞬間、思わず、**うなだれてしまった**という話を聞きました。

**来月の総会で、もし自分が選ばれたとしても、どうかがかかりしないでください。むしろ、期待をもって受け止めてほしいのです。その献身によって、明らかに誰かは生きる力を得、誰かは救いへと導かれるのです。神さまがなさろうとする御業に用いられることが実はどれだけ栄光であり、感謝なことでしょうか。何よりも神様がすべてを覚えておられ、報いてくださることをわたしは信じます。**

イエス様は「わたしは世の光です」とおっしゃいました。「わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです」と約束されました。

私たちが信じるイエス様は、真に世の光です。その光は今も人々を生かし、暗闇の中で彷徨（さまよ）う人々を光へと導いてくださいます。その光であるイエス様に依り頼んで生きる時、暗闇は決して私たちを支配することはできません。

私たち一人ひとりが、光であるイエス様によって日々力を得て、勝利していくことを願っています。そして、私たち皆が世に光を放つ人生となり、私たちを通して、罪と暗闇の中で苦しんでいる人々が、イエス様の光によって救われ、生きる力を得て、光の中を歩いていくことを切に願います。

また、わがオープンドアチャペルが、この地域に光を放つ教会となることを、主の御名によって祝福し、お祈りいたします。